

DADA

シャシェ村は4年ぶりの豊作。乾季に向けて種保存庫建設準備進む

DADAが支援活動をしているジンバブウェでは、今年の雨季は、地域で量や時期のばらつきが見られるものの、4年ぶりの豊作をもたらしました。AZTRECが活動しているマシング州では、一部乾燥の厳しい地域を除けば、州全体として例年の1.5倍の雨量があったと報告されています。

活動支援地のシャシェ村でも、収穫直前の2月下旬～3月上旬には、村のあちこちで2mを超すメイズやソルガムなどが見られたほどです。(右写真は、AZTRECがメイズの在来種の種を栽培している畑での生育状況。立っているのは AZTREC 代表のコスマス氏で身長180cm)。



しかしながら、すべてがうまくいく訳でもありません。例年であれば既に乾季になっている5月になっても雨は降り続けていました。穀物の収穫は、4月から5月上旬にかけておこなわれますが、メイズの場合は刈り取り前に乾燥していることが望ましく、その時期に雨が降り続くと、刈り取る前に作物がだめになってしまう恐れもあります。また、刈り取った後に太陽の下で更に乾燥させるのですが、雨が続けているため、人々は、空とにらめっこしながら、刈り取ったメイズを室内に取り込んだり、晴れたら外に出すなど、落ち着かない毎日を送っています。一部の地域では、この長雨がせつかくの豊作に支障を来たしている場所もあるようです。早魃の地域もあるので、都合のよい話かもしれませんが、今では雨が早く止んでくれることを祈っています。(尾関葉子)

半年振りの会報発行となりました。今号では、2～3月、4～5月に出張してまいりましたので、昨年末から皆様にご協力をお願いしておりましたシャシェ村での種保存庫建設支援についてご報告させていただきます。また、昨年11月に沖縄で行ないました座談会のご報告も掲載しています。あわせてご覧下さい。

目次

種保存庫建設の進捗状況ご報告	2-3
メディア・ウォッチ座談会 in 沖縄 報告	4-7
今更訊けない勉強会第1回を開きました!	8
アフリカクリッパーご報告	8

種保存庫建設進捗状況のご報告

1000米ドルをAZTRECに寄付しました

最初に、皆様にご協力いただいた支援募金の状況についてご報告申し上げます。

昨年度中に頂いたご寄付は、**総額97,500円と50米ドル(31名と1企業)**に達しました。

この場を借りてお礼申し上げます。ご協力ありがとうございました。

頂いたご寄付につきまして、2006年2月の出張の際に、その時点での87,500円にDADAの自己資金を加え1,000米ドル(日本円で121,760円)を手持ちし、AZTRECの代表であるコスマス・ゴネセ氏に直接渡しました。

途中経過報告：建設内容に3つの変更が

天候や経済状況等の関係で、建設内容の変更を余儀なくされた点がいくつかございますので、ご報告申し上げます。

1つ目の変更：建設開始時期の変更～「晴れ待ち」～

今年の雨は雨量もさることながら、雨季の期間が継続的な上に例年の雨季の期間を大幅に上回る長雨となりました。この予定外の長雨で、種保存庫建設スケジュールも残念ながら大幅に狂ってしまっています。

例年なら雨は1月の1ヶ月間止むのですが、今年は11月から休みなく振り続けました。その為、当初予定をしていた1月の間の建設は見送られました。さらに、例年であれば3月下旬頃から雨は量も降る時間も減って、断続的となって乾季に入りますが、今年は5月中旬になっても雨が降り続くという状態。その為、すでに発注済みのレンガ作りも大事をとって完全に雨が上がるであろう6月に延期となりました。建設開始が遅れていますが、最終的な種保存庫の完成は10月の雨季前までには、間に合わせたいとのことでした。

2つ目の変更：デザインの変更～政府指定のデザインに～

年末にお送りしたチラシで「AZTRECでは、将来的には生産した種を市場で販売することを目指しています。その為には国の機関に承認を受けることが必要で、その際、種の保存庫の形状や状態について国立種子銀行の指導が入る可能性がある」とご報告した通り、現在、農業省の検査官がシャシェ村を訪問し、検査官より農場や保存庫の場所(他の畑や人家からある程度の距離が必要等の制約がある)や、保存庫のデザインについて指導を受けています。

AZTRECの種保存事業、単体のNGO事業から全国規模の農業グループ事業へ

DADAがジンバブウェに具体的な支援をおこなったのは、2002年に南アフリカのヨハネスブルグサミットに参加する農民30名とNGOからの引率者1名の旅費の一部を支援したのが最初です。そのサミットの中で開かれた東南部アフリカの農民集会の場で、参加者が中心になってESAFF(東南部アフリカ農民フォーラム)が誕生しました。(詳しくは会報2号を参照ください)。

ESAFFが一番力を入れている種の保存はジンバブウェでも活動の中心となっています。3月下旬に開かれたESAFFジンバブウェの会議では、DADAが支援しているAZTRECの在来種の保存・普及事業が高い評価・賛同を受け、今後この事業は、AZTREC単体の事業としてではなく、ESAFF全体としても同様の事業を進めていくことになりました。

今回DADAが支援をしている種保存庫建設については、ESAFFのパイロット事業(モデル事業)となり、実行団体がAZTRECであるという位置付けになりました。同パイロット事業としては、種保存庫の他に農業産物加工のためのセンターもシャシェ村に建設される予定です。

種保存庫は、乾燥させた実を一つひとつばらして保存する部屋、種を選別する部屋、種の育成状況などを調べ、結果を保存する部屋、選別された種を保存しておく部屋（包装・商品倉庫兼用）の4つの部屋からなる予定です。DADAとしましては、予算額が増えてしまいますが、包装や商品保管用の機材までは無理でも、機材が不要な種保存庫の建設までは支援をしたいと考えています。

3つ目の変更：予算の変更～驚異的なインフレの影響で異常な物価高に～

当初の予測では、1,000米ドル（約12万円）で種保存庫建設の殆どがまかなわれるとしていましたが、結論から言って、**全体の予算の4分の1にしか満たない**ことがわかりました。

これは、今回のデザイン変更によるものに加え、ここ数ヶ月の間の驚異的なインフレ・物価高が大きく影響しています。ジンバブウェでは、数年前からインフレが深刻になっていましたが、ここ数ヶ月のインフレは異常といえるほどで、数日で物の値段が変わる程の勢いです。（右下の「インフレの背景」もご覧ください）。

現時点では、ESAFFを通じてイギリスのドナーからDADAとほぼ同額の支援の表明があっただけで、残りの資金については目処がたっておりません。右表でもお伝えしている通り、現時点では新しいドナーが見つかることはほぼ無理な状況です。

AZTRECでは、代表のゴネセ氏がこれまでも活動資金のために個人の財産（牛等）を売却したり、ローンを組んだりしています。今回の不足分を埋める資金の目処が立たない場合は、農場で生産する野菜や穀物売って足したいという意向を持っていますが、全額を集めるまでには数年かかってしまう恐れもあります。

また、値上がりのスピードが速すぎる為、近日中に出される予算総額もすぐに値上がりする可能性が高く（逆に、公定レートの引き下げがあった場合は寄付した米ドルの価値が上がります）、今の時点で総額も不足額も明確にできないという状態です。

DADAとしましては、①この物価上昇などはAZTRECのコントロールの外の問題である、②AZTRECのスタッフも全員無給で努力している、③何より、これまで一部の大企業に独占されていた種を農民の手に戻そうとする活動に賛同している、ということから、種保存庫の建設完了までは支援をしようかと決めました。2つ目の変更にありますように、包装・商品用倉庫も兼用することになるため、機材購入も必要となりますが、DADAとしては、機材費を除く保存庫の建物の建設完了までは責任を持って支援したいと考えております。

デザインの最終案、予算総額等はわかり次第ウェブサイト、会報等で皆様にご報告申し上げます。

このように不安定な情勢ではありますが、建設の趣旨をお含み置き頂き、今後ともご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

インフレの背景

ジンバブウェ政府が2000年に執行した土地政策への欧米社会の反発から、イギリスを中心とした欧米各国から経済制裁に似た措置をとられており、援助などもほぼ凍結された状態が続いています。

その為、数年来慢性的な外貨不足となっていました。最近の原油高に加え、ジンバブウェ政府が世界銀行からの借金を完済した際の資金繰り等、国内経済に負担がかかりすぎていました。こうしたことがインフレの急上昇の理由と思われれます。

外貨不足は関取引を促します。外貨との交換レートが固定されている公定レートに対し、闇で取引される外貨の交換レートとの差が日に日に広がっています。現在、公定レートは1米ドルに対して9,000～1万ジンバブウェドル（Zドル）前後ですが、闇値は2月の時点で15万Zドル。4月には22万Zドルと、その差は開く一方です。

国内の物価はすべて闇値が反映された額になり、値上がりに拍車がかかることとなります。

引き続き、種保存庫建設へのご協力をよろしくお願い申し上げます。

メディア・ウォッチ座談会 in 沖縄 報告

去る2005年11月5日(土)午後3時より1時間、JICA(独立行政法人国際協力機構)沖縄センターにて、アフリカからのJICA研修生3名にご協力頂き、「メディア・ウォッチ座談会」を開催しました。事前に、新聞記事(毎日新聞2005年6月23日付【先進諸国にほんろうされ 貧しさ解消できぬアフリカ】)抜粋の英訳と、それに関連する質問をDADAで準備し、当日はその質問を中心に“アフリカに対する援助”、“アフリカの農業における取り組み”、“アフリカに対するイメージ”等について語って頂きました。紙面の都合で、全部のコメントを紹介することはできませんが、主なポイントについてまとめました。



「メディア・ウォッチ座談会」の様子。
アフリカからのJICA研修生3名と、司会のDADA代表尾関

なぜ「毎日新聞」のこの記事を取り上げたか

日本国内でのアフリカに関する新聞記事の多くは、「事実の伝達にすぎない情報及び時事の報道」が多いのですが、毎日新聞2005年6月23日付【先進諸国にほんろうされ 貧しさ解消できぬアフリカ】および「鉱物など利権の対象」、「政治利用される支援」、「借金の返済に回される融資」、「まず農業の再興必要」という見出しで書かれたこの記事には、**1)特定の戦争や事件などを扱っていない、2)一国に限定されたものでない(参加者が数カ国に渡っているため)、3)解説記事である、等、**前述した日本に多い「事実の伝達にすぎない情報および時事の報道」とは異なり、アフリカに対する記者(または新聞社)の視点を考えるのに適していると、私たちが判断したためです。

● アフリカに対する援助

まず、「援助には必ず条件が付随してくる。それが問題である。世界銀行などの援助供与機関は、アフリカ全てに対して押しなべて同じ条件を押し付けてくる。中には受け入れ難い条件もある」¹「援助によっては、貧困削減に直接つながらないものもある」といった援助そのものに対する問題点が指摘された。

構造調整などでよく取り上げられる民営化についても、「公的機関によっては民営化が有益でないものもある。しかしながら、国際通貨基金や世界銀行は何でもかんでも民営化と言う」といった否定的なコメントが目立った。

続いて、援助そのものよりも債務や貿易²の方が問題であるという意見が出された。債務がど



Mrs. Gloria: Yeah さん
(ガーナ)

んどんふくらんで、「子供たちは借金を背負って生まれてくる」ような状況であること。また、「国の発展については、何百年と続いた奴隷貿易の功罪が大きく、奴隷の労働力が現在のアメリカやイギリスの繁栄を築いた反面、アフリカはまだ困難から抜け出せないでいる」ことが強調された。

では、どのような援助が望ましいのか。ガーナの Yeah さんは、「パートナーシップに基づいた援助」だと指摘する。その意味は「お互い持っている資源を出し合い、一緒に協働す

る。これをやるからあれをくれ、ではなく、成果はどちらかにだけ有利にならないように分かち合うこと」が大切とのことだった。

● アフリカの農業における取り組み

アフリカの主要産業である農業に関して、ケニヤ、ガーナ、マダガスカルともに、厳しい自然条件・環境のなかで農民が懸命に努力している様子を伺った。

ケニヤの Mule さんからは、「雨季が2回あり作付けは年に3回、主食のメイズだけでなく豆や雑穀を生産する」といった自身の出身地での農業の様子をお聞きした。

ガーナの Yeah さんからは、「大統領特別イニシ



Mr. Obed Mule さん
(ケニヤ)

¹ 例えば油田開発の権利の譲渡が交換条件だったりする、という意見も出された。

² 農産物に付加価値をつける加工業への支援は来ず、欧米は自国の産業を守るために品目によっては輸入を制限していると指摘。

アティヴ”というパーム油やキャッサバの生産拡大や加工の向上に対する国レベルでの支援について紹介があった。また、農業の問題点は、生産ではなくて農産物の保存と輸送にあるという興味深い指摘もあった。マダガスカルの Randrianarivony さんからは、自国における農地改革の重要性が繰り返された。

●“ほっとけない世界の貧しさキャンペーン”と G8 サミットについて

3 人とも、現在世界的に行われている“ほっとけない世界の貧しさキャンペーン”のことは知らなかったが、とりわけ今年（注：2005 年）の G8 がアフリカに注目していたことは知っていたとのことであった。G8 サミット（2005 年 7 月 6 日～8 日、英国スコットランドのグレンイーグルズ・ホテルで開催された、レンイーグルズ・サミット）については、「誰もがアフリカのことを考えていると思う。けれど何もしないままだ。いくつかの国は本当に何もしていない」という焦燥感のある意見が出された。

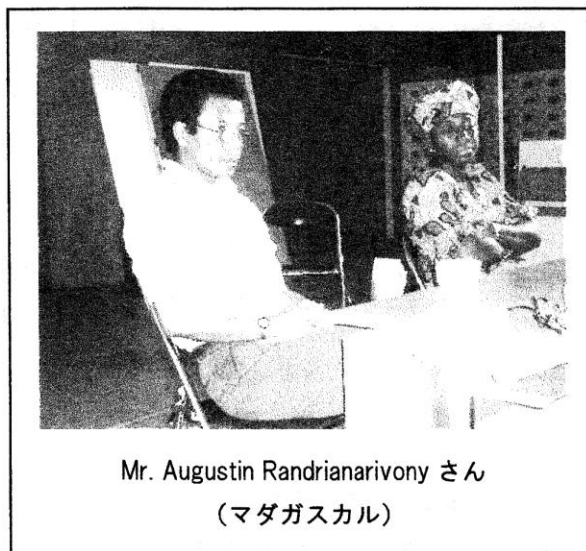
●アフリカに対するイメージ

記事が印象付けている“アフリカ＝貧困”というイメージに対して、「“貧しい”というイメージ、それはある意味あっている。貧困はあちこちに蔓延している。しかし、あえて言いたいのは、それは変革の途中であるということである」といった現地で実際にさまざまな活動をしている人だからこそその意見があった。

また、記事の内容に関しては、「概ね同意できるものの、一般化しすぎているくらいがある」という指摘が異口同音で出された。

より広く、アフリカに対するイメージについて尋ねたところ、「アフリカというと“貧困”、“飢餓”、“エイズ”、“戦争”、“汚職”といったマイナスイメージ、悪い問題ばかりで見られる。それが非常に悲しい」「アフリカには良い側面もたくさんある。否定的な側面ばかりを見ないでほしい」とのコメントが相次いだ。そして、「アフリカには 53 もの国があるのに、“アフリカ”という一つの国にされがちだ。それぞれ固有の文化、伝統、生き方があることを理解してほしい」という意見が、文字通り声を大にして出された。

この質問の時には特に、誰かが意見を述べるたびに、他の二人も大きく頷いたり、さらに補足意見を述べるなど、活発な議論が続いたことから、「アフリカは一つなのではなく、それぞれ固有の文化、課題を抱える複数の国である」という、このあたりまえのことがあたりまえに報道・認識されていない現状、それに対する彼らの思いもを痛感させられた。



座談会の最後に日本人読者に対して伝えたいことを伺ったところ、再度、「アフリカには良い側面もたくさんある。(日本人の) アフリカに対するイメージを変えることが大事だと思う」というメッセージが強調された。

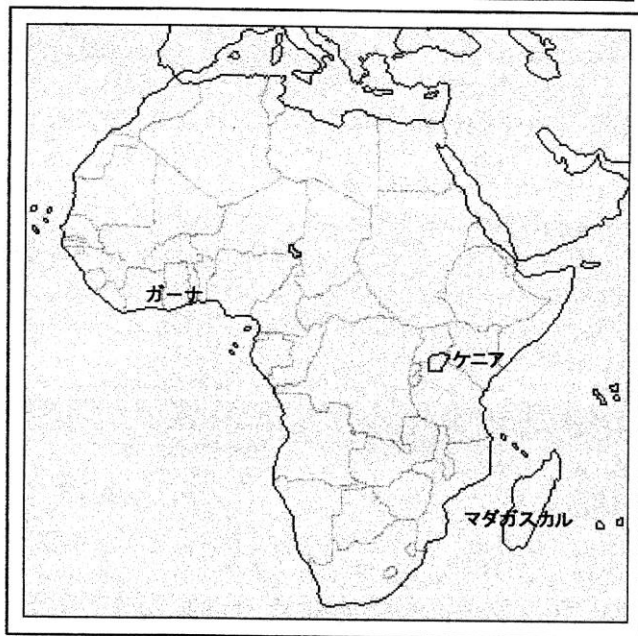
わずか1時間という短い時間でしたが、アフリカ3ヶ国の方から様々なご意見を直接お聞きすることができ、改めて“対話”の大切さをかみしめるとともに、私たちができることは何かを問い直す機会とすることができました。

ご協力頂いた3名の皆様、ありがとうございました。

なお、研修生への連絡、会場の無料借用等、JICA 沖縄事務所より暖かいご協力をいただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

コメント全文に関しては、近日中に HP に掲載する予定です。

また、今回座談会で取り上げた毎日新聞2005年6月23日付【先進諸国にほんろうされ貧しさ解消できぬアフリカ】の記事の全文は著作権の関係で掲載いたしませんでした。詳細は、毎日新聞にお問い合わせください。



DADA の<メディア・ウォッチ>プロジェクトの視点

地理的に遠いアフリカの記事をメディアがとりあげる機会が少ないことは、ある程度仕方のないことなのかもしれません。しかし、同時にアフリカのニュースや情報に触れる機会があまりにも少なかったり、とりあげられる情報やその視点に顕著な偏りがある場合、アフリカに対する特定のイメージや事実とは異なる理解がまかり通ってしまうことがあります。

メディア・ウォッチを通じて、私達はアフリカの記事が量、質の面で改善されることを目指しています。そのために、まずは発表された記事をただ受け入れるのではなく、それに対する評価を、記者の方々に応援する意味での評価も含めて、何らかの形でメディアに返していくことが必要なのではないかと考えています。

今更訊けない勉強会第1回を開きました！

今更訊けない勉強会とは、ズバリ、日ごろ DADA スタッフが「今更他人には訊けない…」と思いつつもかねてより疑問に思っていたこと、DADA の活動、とりわけジンバブウェにおける活動を行っていく上で背景知識・基本知識として知っておくべきことを習得することを目的とした、DADA スタッフ・ボランティアのための勉強会です。昨年のスタッフ会合でその必要性を確認し、早速年明け1月10日に第1回目を東京・調布のみさと屋さんにて開きました。

第1回目は、「水・灌漑」をテーマに、灌漑の専門家でいらっしゃる高瀬国雄さんを講師にお迎えして、お話を伺いました。今回「水」をテーマに選んだ理由は、前回の会報執筆時に、ジンバブウェの食料事情の情報収集のために、国連食糧農業機関 (FAO) の報告書などを読んだ時に出てきた水関連の言葉の意味が分からなかったためです。単語の意味にとどまらず、地表水と地中水の違い、水の蒸発量の測り方などについての DADA スタッフからの質問に丁寧にお答え頂きました。また、高瀬さんの過去60年間の経験に基づいた、マクロ・ミクロ双方の視点からのアフリカ農村開発における展望に関するお話や、DADA の会報第2号へのコメントも頂きました！お送りした会報に沢山下線がひっばってあり、1ページ1ページに貴重なコメントを頂戴し、DADA スタッフ一同感激しました。予定の2時間をすぎても質問が終わらず、内容盛りだくさんの充実した勉強会となりました。

今後も今更訊けない勉強会を不定期に開催していく予定です。スタッフ一同、歩みは遅くとも、少しずつ、学んでいきたいと思えます。

引き続き、アフリカクリッパー (ボランティア) 募集中！

【アフリカクリッパーとは】アフリカ記事の切り抜きは、DADA のメディアプロジェクトというプロジェクトの一環です。これは、日本でのアフリカ報道について考える機会を持つことを目的にしています。皆さんがご家庭で購読している新聞のアフリカ関連記事が掲載されているページを切り取り、DADA に送ってください。

【アフリカクリッパーにお願いしていること】

- 新聞記事を月ごとにまとめ、翌月始めに事務局宛てに郵送
- エクセルで作成したフォーマット (集計票) への入力
- DADA に送ってくださる送料もご負担いただくと助かります。

参加ご希望の方は、ぜひ DADA 事務局 (dada-africa@nifty.com 担当: 廣内) までご連絡下さい。

//編集後記//

- サッカーの世界カップでアンゴラが初出場した。私の頭の中ではアンゴラというと「和平」と熟語のように出てしまうくらいだったのだが……。多くの選手の家族や友人が内戦で命を落としたという話を聞き、戦争と平和を改めて考えた。(本)
- 5月は息子と私の誕生日があり、家族で外出しました。13日は友人の結婚式 (セネガルのブービーを着て、二次会の幹事を務めました)、14日はタイフェスティバルとイベント目白押し。20、21日はアフリカンフェスタです！(佐)
- 階段を駆け上がるように成長していく子どもたちをみていてふと思った。自分はアフリカやジンバブウェのことを、関わってきた年月分学んでいるかな、と。(廣)
- 昔付き合っていた人に「距離と時間には勝てない」といわれたことがある。恋愛ではないけれど、アフリカとの距離・アフリカにいない時間に負けそうになる自分が時々いる。なんか最近弱気だなあ……。 (尾)
- アンゴラで一緒にボランティアをした友人たちと久々に会う約束をした。当時無力感と問題意識で盛りだくさんで一緒に帰国したメンバーだ。どこかの土地を去るのにあれだけ大泣きしたのはアンゴラが最初で最後だな～なんてメールを交わしながら。(相)

会報 DADA 第3号 2006年6月14日発行

《編集責任者》本田真智子 《編集スタッフ》廣内かおり、佐藤由規、相川明子

《発行人》尾関葉子

《発行所》アフリカと日本の開発のための対話プロジェクト

(Dialogue and Action for Development Alternatives in Africa and Japan)

郵便物送付先： (東京) 〒182-0022 調布市国領 2-5-15 調布市市民プラザ あくろす
市民活動支援センター内 ボックス No.7 DADA
(沖縄) 〒900-0013 那覇市牧志 3-2-10 ぶんかテンプス館 3階
那覇市 NPO 活動支援センター 気付 DADA

FAX : 042-444-2531 E-mail : dada-africa@nifty.com URL : http://homepage3.nifty.com/DADA/

※この会報は古紙 100%のリサイクル紙を使用しています。

